玄冬のものがたり

―夏目漱石『こころ』序説―

工藤　茂

1

日本の近代文学にも鳴滸の系譜が存在する。文学に登場する人物を鳴滸な存在と見る文学者の系譜である。見方によって、この世に存在する人間はどんな人間であっても完全ではない、と考えることが出来る。人間をそのように見、創作する文学者を私はその系譜に入れようと考える。夏目漱石もそのような文学者のひとりである。

明治三十八年の『吾輩は猫である』の登場人物や明治三十九年の『坊ちゃん』の登場人物は勿論のこと、明治四十二年の『それから』の登場人物も、大正三年の『こころ』の登場人物も見方によって、鳴滸な存在に見えてくる。例えば『それから』の長井代助は、〈友情〉の美名に目がくらみ、友人平岡に心から愛している美千代を譲り、後になって心の真実に目覚め、彼女を取り戻そうとする。最初から己の心の真実に従っていれば、このような悲喜劇は起こりようがなかった。しかし、ここにまた人間の真実の姿がある。それを漱石は描いて見せるのである。

ところで、この小説を読んでいた時、漱石の小説には以下のように呼べる小説のあることに気づいた。

青春のものがたり
朱夏のものがたり
玄冬のものがたり

『それから』には色彩に就いての叙述がある。赤と青の人間の心理に及ぼす意図的な叙述が。要約すると以下のようになる。

代助はふと、ダヌンチオ（イタリアの詩人・劇作家）が、自分の家の部屋を青色と赤色に分けて装飾している

と云う話を思い出す。ダヌンチオの主意は、生活の二大情調の発現は、この二色にほかならないという点に存するらしい。だから興奮を要する部屋、即ち音楽室とか書斎はなるべく赤く塗り立てる。また、寝室とか休憩室とか、すべての精神の安静を要する所は青に近い色で飾りつけをする。というのが心理学者の説を応用した詩人の好奇心の満足とみえる。

代助の思い巡らすこの説は、単に詩人の色彩に関する生活志向にとどまることなく、小説『それから』を底流する重要なイメージとなっている。それが私に右のような考えを与えたのである。四季にはそれぞれ色のイメージがある。そのイメージと漱石の各小説を貫くイメージを重ねた時、その文学の一つの特色が浮かび上がってきたのであった。

2

明治四十一年の『三四郎』が青春のものがたり、明治四十二年の『それから』が朱夏のものがたりだとすれば、明治四十三年の『門』、大正三年の『こころ』は玄冬のものがたりであろう。

慶應三年生まれの漱石は、明治維新を越えて明治を生き、大正を迎える。大正になって発表された漱石の主な作品は、『行人』『こころ』『道草』『明暗』であった。これらの小説の中で明治天皇の崩御と乃木将軍の殉死に深く触れているのは『こころ』である。

「下　先生と遺書」の五十五には明治天皇の崩御について以下のように書かれている。

> すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終わつたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。

これを読むと、漱石が先生を維新後の明治の時代に生き、明治の終焉と共に終える人間として設定していることに気づく。『それから』の代助は維新以前の社会を逆接で受ける新しい人間像として描かれていた。この人間像を承接するのは、『こころ』では「上　先生と私」、「中　両親と私」の「私」であろう。先生は明治と共に消えて

いく過去の人間像として設定されていたことが分かる。

乃木大将の殉死については、次の五十六に次のように述べられている。

（前略）御大葬の夜私は何時もの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考へると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ殉死だと云ひました。

手元にある朝日新聞社編『朝日新聞に見る日本の歩み・屈折のデモクラシー1』によると、大正元年九月十四日土曜日の「大阪朝日新聞」に、東京電話十三日として「乃木大将夫人と刺違へて死す」という記事と、故乃木大将の黒枠写真が掲載されている。そして、大正元年九月十七日火曜日のそれに、「乃木大将及夫人薨去の真相」、「石黒男（男爵）宛の遺書」、「遺言十箇条」「石黒男将軍の最後を語る・夫人は将軍の最後を見届けて後自刃」等の記事が見受けられる。

漱石は当時東京にいて朝日新聞社に勤めていた。従って「東京朝日新聞」によって乃木大将の殉死を知ったと思われる。『こころ』はおそらくそれによるものであろう。が、ここには参考までに「大阪朝日新聞」の記事をあげておいた。

小説の本文はさらに以下のように続いている。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死なう死なうと思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらへて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間死なう死なうと思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

右の文章に見える〈西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死なう死なうと思つて、つい今日迄

生きてゐた〉という箇所は、先に掲げた乃木大将の「遺言十箇条」に実際に書かれている。が、ここで大事なのは友人Kの自殺からこれまで生きのびて来た先生と、三十五年間死ぬ機会を待って生きて来た乃木大将とが重層的に描かれていることであろう。だから漱石はこの後に続けて、「それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです」と書いて行くのである。

3

其時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の白白を聞かされたそれと略同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立ちに立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又あゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照らしました。さうして私はがたがた顫へ出したのです。

先生の遺書にKの自殺の場面はこのように描かれている。時はあたかも冬であった。Kを出し抜いて奥さんにお嬢さんとの結婚を許してもらった私は、Kを裏切った結果だと思う。しかし、本文を熟読した読者は必ずしもそうだとは思わない。Kの自殺は求道者として自己を制御出来ないKの苦悩に発する行為とも受け取れるのだから。

右の文章に〈もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照らしました〉という箇所がある。私がこの小説を「玄冬のものがたり」だと考えるのは、ここにその原因がある。〈黒い光〉とは先生の霊魂を玄冬に閉じ込める光と解釈するのである。以来、先生の生涯には春も夏も秋もなかった。私が先生と出会ったのは夏の鎌倉であった。季節は夏であったのに、先生の精神は玄冬の中にあった。先生の異様さはそこにあったのである。

先生の遺書はこの部分の後、さらに次のように続いている。〈それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になつてゐました〉。先

生は、〈もし夫が奥さんや御嬢さんの眼に触れたら、何んなにか軽蔑されるかも知れないといふ恐怖〉に怯えながら眼を通す。しかしそこには、先生が危惧したような内容は書いてなかった。先生は、〈まづ助かつた〉と思う。続けて先生の遺書には括弧付きで〈(固より世間体の上丈で助かつたのですが、其世間体が此場合、私にとつては非常に重大事件に見えたのです。)〉と添えられている。先生はこのような場合に直面しても、否このような場合だからこそ、己を守らざるを得なかったのである。こうして、世間体の上だけで助かった先生は、その精神を黒い光に貫かれて、その後の生涯を玄冬の中に生きるしかなかったのであった。小説『こころ』を玄冬のものがたりと称する所以である。

先生をこのような世界に追い込んだ原因は何であったのか。それは先生の性格であった。漱石は「下　先生と遺書」の三に、その性格を次のように述べている。

たゞ斯ういふ風に物を解きほどいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです。(略)此性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来益他の徳義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。それが私の煩悶や苦悩に向つて、積極的に大きな力を添へてゐるのは慥かですから覚えてゐて下さい。

この性格設定は非常に重要である。先生は「上　先生と私」の三十一では私に〈私は是で大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから〉と言い、自分が他人に欺かれたことを告げる。

「私は他に欺かれたのです。しかも血のつゞいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄背負はされてゐる。恐らく死ぬ迄背負はされ通しでせう。(略)然し私はまだ復讐をしずにゐる。考へると私は個人に対する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢやない、

彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎むことを覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ。」

〈此性分〉が先生を裏切った身内や他人に向けられているうちは、まだよかった。が、親友Kとの人間関係において自分自身に向けられた時、『こころ』の悲劇が起こる。右の先生の会話の後半には、そのことが語られている。これは悲劇というよりは、むしろ悲喜劇と言った方がよかろう。私が自然に尊敬していく先生にして、このような悲喜劇を内在させている。そこに、人間の存在をその根源において嗚滸と見る漱石の人間観を、私は見るのである。

4

〈私は何千万とゐる日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。貴方は真面目だから。貴方は真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから〉。（下　先生と遺書の二）

先生が遺書を書いた理由を漱石はこのように述べる。さらに『こころ』の最後の章では、次のように書く。

（前略）私は粋狂に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒労ではなからうと思ひます。

そして、最後に〈私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です〉とつけ加えている。これは作中人物「先生」の告白であると同時に、作者漱石の創作意図でもあろう。彼は文学を〈真面目に人生そのものから生きた教訓を得たい〉人々に対するメッセージとして創作し、朝日新聞紙上に発表し続けていたのである。

（本学教授）